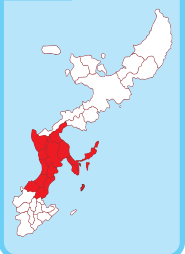


MAP



城跡に登り、優しい風にさらされると、こころ穏やかになる。ここに刻まれた歴史に触れると強すぎる自我が諭されるようだ。頑張りすぎる心、少し休めてあげよう。ここ中部には秘められた源があるようだ。平成12年12月21日に世界遺産に登録された5城跡の内3城跡は、ここながみにある。今回の世界遺産登録は独自の歴史と文化を育んできた沖縄県民の自信と誇りにつながるとともに、21世紀に向けて沖縄の歴史と文化を世界にアピールする絶好の機会となった。どこかアンティークな薫りのする民俗資料館もながみに多い。先人達の跡を知り、懐かしさを覚え、さらなる未来に思いを馳せる。世界が広がる瞬間である。

【諸見民芸館】



【人間国宝の那嶺貞さん】  
- 読谷山花織  
(ゆんたんざはなうい)-

与那嶺貞さんは、読谷山花織の復興に成功し、沖縄県指定無形文化財技能保持者となっている。自らが持っている技能を駆使し、独自で地機(じーば)から高機(たかはた)への切り替えに成功。複雑な機様の技法化と共に今日の花織の礎を築かれた。14世紀後半に東南アジアから伝わったとされる読谷山花織は、細やかな点と線の幾何学模様で可憐な花を描き出す。世界をまたにかけて繰り上げられた交易の成果として不思議な魅力につつまれる花織、まさに海のシルクロードを渡ってきた感じがする。ところが、明治の半ばでその技術は途絶えてしまった。しかし、お年寄りの記憶や村に残る技術を頼りに、昭和39年見事に復興することができた。今では花織の技法は、沖縄で一番古く、紋織の発祥の地となっている。

【中村家(国指定重要文化財)】

記録によると1720年代に屋敷を造成し、建物は尚敬王1700年代の中頃と推定され、豪農としての風格を構えた建物は約472坪の屋敷に整然として、それぞれの位置に建てられている。(北中城村大城)



【伊波メンサー織り】

伊波メンサー織りは、その内容を民俗文化財として指定されている。これは、伊波メンサー織りの技術保持者としての伊波カマドさんと同じメンサー織りの道具一式をあわせて指定するもので、有形無形の意味を合わせた指定となっている。伊波メンサーは織機の原型と思われる原始的の用具を用いて織られる。日本に残る織機の中では、北海道のアツシ織と八丈島のカット織の三例しか見られず、非常に貴重なもの。伊波メンサー織は、読谷山花織などのような派手さはないものの、素朴な味わいがあり、当時の生活の知恵がうかがえる。

中部にある民俗資料館

【諸見民芸館】

諸見民芸館は、1971年に伊禮氏が開館した私立の民俗資料館。沖縄の庶民の歴史遺産が所狭しと展示され、どこか古物商のような不思議な空気が漂っている。展示物は昔をしのぶ各種の民具類をはじめ、琉球の古い時代の主な陶器類、戦争資料や沖縄戦直後の廃墟の中で作り出された生活民具類や日本軍の武器にいたるまで約9000点。開館は9時30分～17時30分。年中無休。入館料は一般300円。中学生200円。小学生100円。TEL 098-932-0028

【与那城町歴史民俗資料館】

平成7年に与那城町庁舎の中に開館した。館内には衣食住の生活道具を中心に、農具や漁具、葬祭など多くの民俗資料が展示されている。開館は9時から17時。休館日は月曜日と祝祭日。入館無料。TEL 098-978-3149

【読谷村立民俗資料館】

歴史、民俗、考古の分野を中心に先人たちの残した貴重な文化遺産を調査研究し、これまでに民俗資料7000点、考古資料40000点にのぼる膨大な資料を収蔵。開館9時～17時。休館日は月曜日と祝祭日。入館料、大人200円。小中学生50円。TEL 098-958-3141

【石川市立民俗資料館】

石川市立図書館の2階部分に併設されており、農具や衣類、織物、文化財など、昔の生活を忍ぶことができる資料2500点を展示、入り口には馬を用いて回転させる三連歯車のサトウキビ絞りが出迎えてくれる。開館は9時～17時。休館日は火曜日と祝祭日と慰霊の日。TEL 098-965-3866

ながみの3城跡

- 20世紀最後の世界遺産へ -

平成12年12月21日に世界遺産へ登録された5城跡のうち3城跡は、ここながみにある。今回の世界遺産登録は、独自の歴史と文化を育んできた沖縄県民の自信と誇りにつながるとともに、21世紀に向けて沖縄の歴史と文化を世界にアピールする絶好の機会になった。

【勝連城跡】

琉球王国の王権が安定していく過程で、国王に最後まで抵抗した有力按司・阿麻利の居城。阿麻利は、1458年に国王の重臣で中城城の城壁の描くカーブが優雅で美しい。居城した護佐丸を滅ぼし、さらに王権の奪取を目指して国王の居城である首里城を攻めたが大敗して滅びてしまった。これにより首里城を中心とする中山の王権は安定した。半島のほぼ中央の丘陵にあり、端正よく築かれた石積みみの城壁の描くカーブが優雅で美しい。頂上からは、中城湾や金武湾、その中に浮かぶ島々など、太平洋が一望できる。昭和47年5月15日、国の指定史跡記念物となった。

【座喜味城跡】

1420年代に有力な按司であった護佐丸によって築かれた城。北山が減った後にもその旧勢力を見張る目的で造営され、琉球王国設立の初期に国家権力の安定に重要な役割を果たした。

【中城城跡】

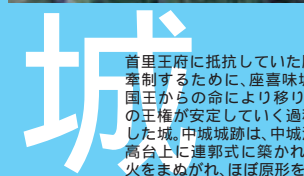
首里王府に抵抗していた勝連城主の阿麻利を牽制するために、座喜味城主であった護佐丸が国王からの命により移り住んだ城で、琉球王国の王権が安定していく過程で重要な役割を果たした城。中城城跡は、中城湾にそった標高160mの高台上に連郭式に築かれた城で、先の大戦の戦火をまぬがれ、ほぼ原形をとどめている。

【野国總管】

野国總管は、嘉手納町の野国の出身で、尚寧王時代に首里王府の進貢船(貿易船)の總管役を勤めた人である。總管という役職は進貢船の中で事務を管理したり、航海の安全を祈ったりする事務長のことと言われ、總管の本名は分かっていない。沖縄と中国との正式な国交は1373年(文中元年)に始まり、1872年まで続いた。1605年(慶申年)に中国福建省福州より甘藷の苗を持ち帰り郷土の野国村で栽培した。これらさらに真志間切垣花村の儀間具常が野国總管より栽培法を習い、約15年後には沖縄本島に普及した。1615年(元和元年)にウィリアム・アダムスによって那覇から長崎の平戸へ伝えられ、それをリチャード・コックスが北九州一帯に広めたと伝えられる。その後、1705年に薩摩の前田利右衛門により沖縄から薩摩に伝えられ、唐藷と呼ばれた。さらに1735年に青木昆陽によって甘藷の栽培が開東以南に広がり、薩摩藷と呼ばれるようになった。野国總管は俗に「うむ大主」と呼ばれて尊敬され、産業の恩人として県民や町民から親しまれている。

【仲原遺跡(国指定重要文化財)】

伊計島のほぼ中央にある貝塚時代中期の集落跡。竪穴式住居や石灰岩の上に粘土を張り床とした住居跡などが発見された。住居跡内に埋葬された人骨や土器、石斧なども発見されている。現在は竪穴式住居を復元しており、貝塚時代の人々の暮らしを知ることが出来る。(与那城町伊計島)



歴史